



# 艶母散華

息子の友人に犯されて

空蝉

挿絵 / ズンダレぼん

立ち読み版



Contents

## 目次

第一章	日常に入り込んだ影……………	4
第二章	精臭に焦がるる……………	49
第三章	衆人披露……………	88
第四章	母子背反……………	129
第五章	染みる牡臭、馴染む肉壺……………	190
第六章	合格祝いの日……………	242

## 登場人物

Characters

### 高瀬 頼子

(たかせ よりこ)

黒髪のロングヘアが艶やかな、Gカップ美巨乳の三十五歳塾講師。夫の単身赴任のため息子・優弥と二人暮らし。真面目で責任感が強く世話好きだが、押しに弱い一面も。

### 須永 マモル

(すなが まもる)

頼子の息子・優弥の同級生で、頼子の塾の教え子。小柄な体格、鷺鼻、ぎょろ目に、おどおどとした態度も加わって、周囲に根暗な印象を与える。頼子に邪な思いを抱く。

### 高瀬 優弥

(たかせ ゆうや)

頼子の一人息子。成績優秀、容姿端麗、素直で母を慮れる性格で、学園でも人気者。

### 第三章 衆人披露

1

塾のトイレで頼子が絶頂地獄に沈められてから、七日。年の瀬が差し迫った事で塾も休校となり、マモルと顔を合わせなくなつてから三日が経つた、十二月二十五日の朝。

頼子は鏡台に向かい、陰鬱な面持ちで身支度をしていた。冴えない表情の原因は、昨晚唐突にかかつてきた一本の電話にある。

『明日。一緒にプール行こう。デートしようよ、ママ』

四日ぶりに耳にする粘着質な声音。マモルからの呼び出しだった。

『来ないと、写真と動画を撒いちゃうよ』

脅迫を受けて渋々承諾したものの、気が乗ろうはずもない。指定された場所が、市立のスポーツセンター内にある室内温水プール場という事も、頼子の頭を悩ませる。

(人目のある場所に誘うなんて、一体あの子は何を考えているの?)

昨晚、受話器の向こうでマモルが浮かべていたであろう表情と思惑を想像すると、心が雨雲の如く曇ってゆく。それでも、従う他に道はないのだ。渋る気持ちを無理矢理に納得させ、頼子は化粧を終えた。

嘆息しつつ仰ぎ見た鏡台の中には、いつもとは違う自分の姿。日頃より少し薄めの化粧をし、朝食の時までは結っていた黒髪を解いて、まっすぐに梳き直した頼子の顔が映っていた。

「何、してるんだろう、私」

これから行く先で汚されるかもしれない。十中八九そうなるだろうと危惧し身構えていながら、その相手に指示されたとおりの身支度を整えている。憂える表情となった鏡の向こうの自分を見るにつけ、情けなさが込み上げる。

化粧も、髪を下ろしたのだった望んでの事ではない。全てマモルからの言いつけによるものであり、否応なく従わされた末でのイメージチェンジだ。

（優弥を、守るため。そうよ、それ以外の理由なんて、ないじゃない）

自身の忍耐の理由を再確認して、鏡台の前から立ち上がる。意を決して自室のドアを開け、飛び出した直後。

「母さん、やっぱりまだ居たんだ」

「ゆ、優弥？」

戸の前に立っていた息子と出くわし、危うくぶつかりそうになった。

「どうしたの。こんな所に立って」

彼の部屋は一階にあり、特段の用がない限りは二階へと来る事はない。まさか異変を察せられてしまったのか——。緊張とわずかな喜びを胸中に秘めた頼子が聞いただせば、優弥はあっさり。いつも通りののにこやかな顔で二階へと来た理由を口にした。

「そろそろ時間だけど、なかなか降りてこないからさ。呼びに来たんだ」

「そ、そう。ありがとう」

広がる安堵と、幾ばくかの落胆。相反する想いを喉元に押し込めて応じる。努めて平静を装ったつもりだったが、声に震えがなかったかどうか、正直な所、自信がない。それでも黙っていると不自然だ、との思いに駆られ、続けざまに話を振った。

「どこか変じゃないかしら」

「ん。そうだなあ。いつもより、若く見える。かな」

アハハと軽く笑った優弥の答えは、先刻鏡の前で頼子自身が抱いた感想とまるつきり同じものだった。

「でも、スイミングスクールに通うんだよね？ 泳ぐんなら化粧は要らないし、髪も

いつも通り結ったままで良くない？」

「今日は初顔合わせだもの。母さんだって、少しでもいい印象を与えたいわ」

至極当たり前の疑問を持った息子に対し、昨晩から考えていた通りの嘘を舌に乗せる。スイミングスクールへ行く、と最初の嘘を告げた際の愛息子の笑顔が思い出され余計心苦しかったが、それもこれも、その息子のためなのだ。心を鬼にしてつき通す覚悟を、頼子はとうに固めていた。

「最近疲れた顔してる事多かったし、しつかり楽しんでおいでよ」

その疲労の元にこれから会いに行くのだ。陰鬱な気持ち隠し通す母の窮状など知る由もない優弥の満面の笑顔を見るのが辛い。後ろ髪を引かれる思いで玄関までやって来た頼子の背に、再度息子の声がかかる。

「今日はクリスマスだし、うんと腕を振るうから楽しみにしててよ」

「……それは、私の言う台詞でしょう。ふふ、でも楽しみにしておくわね」

毎年、クリスマスは親子揃って料理の腕を振るうのが高瀬家の恒例だ。去年は息子の焼いたローストチキンを夫も含め三人で食べた。笑顔の絶えなかった去年の星夜の記憶が、頼子の重い足取りをさらに引き留めようとする。それでも。

（今日を耐えれば、優弥と一緒にクリスマスを過ごせるんだから……！）

新たな幸せを育むために、前を向く。

「じゃあ、行って来るわね」

「行ってらっしゃい」

笑顔で手を振る息子に見送られ、頼子は集合場所である総合施設へと向かった。

## 2

——こんな事なら、多少彼の機嫌を損ねようとも、自分で水着を用意するんだった。女子更衣室の一角。几帳面に折り畳まれた自身の衣服が入るロッカーの前で、着替えを終えた頼子が嘆息する。見下ろす視界に映るのは、入館前にマモルが袋ごと手渡してきた競泳用水着を纏った、我が身。

「きつと、あの子の事だからわざと小さいサイズを用意したんだわ……」

異常性欲者である少年の用意した水着はサイズが一回り以上小さい代物だった。

特に窮屈な胸元の生地などは目一杯引き伸ばされて、押し潰れた乳房の輪郭を浮かび上がらせ、異様な卑猥さを醸している。競泳水着であるだけにぴったりと肌に吸着し、くびれたウエストから安産型のヒップに至るまで、成熟したボディラインを余す

ところなく浮き上がらせてもいる。胸と尻に生地を取られ引き上げられた股布がハイレグ気味に食い込んで、土手高の股間をひと際卑猥に見せてもいた。

乳も尻も股も、きつく搾られているかのような心地に見舞われている。

(こんな状態で人前に出るなんて……信じられない)

引き絞られる胸の先端が、ウズウズする。尻に食い入る生地の締め付けが肉付きの良い太腿を余計にむっちりりと張らせて、全身に羞恥の火照りが蔓延していた。知らず知らず内腿をすり合わせ、尻を振ってモジついてしまう。

「く、う……う、うんっ」

普通に歩行するだけで食い入る競泳水着によって、肉の悦びが否応なしに絞り出される。塾トイレでの連続絶頂体験を経て開花した熟肢体の敏感さが、ただただ恨めしい。どうにかそれでも着心地を正そうと指で食い込み部分を直しつつ更衣室を出たところで、向かいの男子更衣室から出てきたマモルとかち合った。

「こ、この水着小さすぎるわ」

「う、うん。それでいいんだ。似合ってるよママ。ボクの見立て通りだ……びつちり感がすごくエロい」

意図的なサイズ間違いを認める旨の発言をしたマモルに対し、いつそうの嫌悪が煮

えたぎる。

「お願いだから、人前でその呼び方をしないで。早く、行きましょう」

今は運よく周囲に人の影はなかったが、一刻も早く水の中に浸かり込んで身を隠してしまいたい。が、その願いは叶わなかった。

「薄化粧に、黒髪ロングヘア。すごく似合ってるよ、ママ」

指摘を無視したマモルの下卑た視線が、腰の引けた頼子の競泳水着の上を這い回る。薄手の水着越しに裸体を視姦されているような錯覚に囚われ、頼子のへその奥が不穏に疼く。

「ああ。おっぱいもお尻もいつもより大きく見えるし、それに、い、いつもは絶対に見られないママの生足、ムチムチの太腿っ……」

明け透けな発言と視線を浴びせられ、身を隠そうと前屈みの姿勢を取る。その三十路らしからぬ初々しい反応が、飢えた子供の胸にさらなる嗜虐を呼び込んだ。危険を感じた頼子が腕を組むようにして胸元を隠すと、顔を寄せ食いついてくる。

「アイツは、今日出かけてるんだよね」

「え、ええ。優弥なら、昼から友達と出かけるって言っていたわ。……あなたは、一緒に行かなくて、いいの？」

「ボクが居ない方が、連中は盛り上がるよ。いいんだボクは。ママと一緒にいる方が断然楽しいし」

話を逸らそうとした頼子の発言に、淡々としたマモルの声が被さった。他の学友に歓迎されないというのは、事実なのだろう。陰湿で根暗、粘着質な性根。旺盛すぎる性欲。負の要素ばかり孕んだ眼前の子に、つい憐憫めいた想いを抱きかけた矢先。

「……っ!! あ……っ」

不意にマモル以外の視線を肌と感じた頼子が、視線だけを動かして周囲を見渡した。すると、遠巻きだがいくつか、こちらに向いた人の姿が目に入る。いつの間にか、きつめの水着に身を包む媚熟女の肉体に、好奇と好色の視線が注がれていた。

（嘘！ 見られてる！）

身を隠さなければ。早くこの場を逃げ去りたい——。視線の矢に貫かれた内腿が、焦燥に駆られるほど女々しくモジついてフェロモンを振り撒き、なおさら牡の視線を引き寄せてしまう。

「ひっ、い、嫌あ……」

「見られるのが嫌なら、ボクにくっついてるといいよ。ボクが守ったげる」

——そもそもこんな目に遭わせているのはあなたじゃない！

よつぽど言い募りたかったが、今は論争する時間さえも惜しい。怒りを噛み殺し少年の背に身を寄せると、すぐにマモルが振り向き、正面から向き合う格好となった。

「どうして君までこつちを向くのっ!？」

前傾姿勢で、伏し目がちのマモル。その姿に初めて凌辱行為に及んだ日の彼の姿が重なる。頼子の顔に渋柿を食った時のような表情が浮かんだ。

「まさか、あなた……」

「へ、へへ。勃っちゃった。ボクのコレもママの身体で隠すから。おあいこだね」

小声で耳打ちした頼子の予想を、へらつと浮ついたマモルの言葉が追認した。

「お股の毛、処理したんだね」

「それはっ、はみ出ちゃうから……仕方ないじゃない」

ひそひそと告げてくる少年の音量以上に声を絞って、頼子が反論する。その顔には羞恥と怒りの色が半々浮かぶ。前屈みの少年の目線がちょうど話題の部位に向いている事に気づいたが、身をずらせば周囲の客に見られる。視線で犯す相手を入れ替わるだけだ。諦観に支配され身じろいで、せめてもと右手で股間を覆う。

処理前の状態を、マモルは見えて知っている。以前のそれと見比べられた——羞恥の現実が、女芯からの火照りを誘発した。

前夜にもしもの事を考え施したデリケートゾーンの陰毛処理。秘すべき行為の全容まで覗かれたような気がして、今度は耳まで羞恥の色に染めた頼子が顔をうつむかせる番だった。

「うひ、ひひっ。そろそろ、行こっか」

きつい競泳水着に包まれた艶母の肢体を心ゆくまで堪能して、マモルがようやく移動の意思を示す。その卑怯ぶりを咎められない状況に歯噛みしつつ、頼子はようやく視姦地獄から解放される安堵で胸ふくらませる。

「そ、そうね。じゃあ……。あっ!!」

恥じらいを隠したまま足早にプールへと向かおうとした頼子の、股を隠していた方の手を、ぎゅつと小さな手のひらが捕まえた。手指を絡められ、反射的に顔を上げれば、すぐそばに美少年とは言い難いマモルの笑顔が映り込む。

「行こ……ママ」

「とにかく、前。その、海パンのふくらみを隠しなさいっ……」

「ママはお股、手で隠さなくていいからね、ボクの背中にくつついてればいいから」

連れて行かれるその先に待つのが、新たな淫蕩の地獄である事を確信していながら、不穏なときめきを水着の食い入る身の内に押し込め、マモルの導きに従った。

「ママにつけてほしい物があるんだ、ボク」

「な、何？ 変な物は、許してちょうだい」

問い返した艷母の声の震えを感じ取り、ほくそ笑む。そんな卑屈な少年に手渡された物を目にした途端。驚愕に包まれた頼子が、言葉を失くした。

「つけないと、ね。今日来た意味がなくなっちゃう」

動画と写真の件を仄めかし、手のひらに乗るそれを強制的に握り締めさせて決断を迫る。マモルの機嫌を取り媚びる事が至上命題の頼子にとって、拒否権など、最初からありはしない。

「わ、かったわ。……でもつけ方が、わからないから」

泣きたい気持ちで承諾した頼子の尻を、マモルがさす。切ない疼きを植え付けた上での宣告に、モジつく豊臀がすがって応じた。

「プールに入ったら、すぐにこっそりボクが挿入してあげるから。安心して、ママ」  
絶望と恥辱の予感にうつむく頼子の手を改めて握り返し、マモルが今日一番の笑みを浮かべる。小柄なその背に張り付くようにして、水着食い入る下肢を隠し、頼子は頼りない足取りでプールに向かった。

「本当に、綺麗だよ。今日のママ」

広い温水プールのふち。隅の一角に陣取り浸かったマモルが、陶醉した口振りで煽おだててくる。彼に背後から抱かれる形で身を寄せた頼子は、苦悶の表情を浮かべて、その世辞を聞いていた。

「つふ、うう……んうう……つ。も、う……取つて。お願いよお」

熱に浮かされたような瞳と声音で、頼子が乞う。

「だめだめ。まだ入れてから十分も経ってないじゃん」

マモルは、当然といった様相で断じた。

「ううつ、んんう……つ！」

頼子自身と寄り添うマモルにしか聞こえない程度の、小さな駆動音が轟く。音の発生源は、身悶える頼子の尻の奥。密やかに息づく肛門の内に留まり、ソレは振動し続けていた。

「防水加工にワイヤレス。省音タイプで遠隔操作も可能だなんて、こういう風に使う事前提の性能だよねえ。ね。ママも、そう思うでしょ？」

「もう、立っているのも精一杯なのよ……」

七分前。プールに浸かるなり、マモルの手で尻に挿入された、卵状の形をした小さなピンク色の物体。遠隔操作で振動する卵ローターの与える刺激に、腸粘膜が打ち震えながら悲鳴を上げている。すぐ後ろに立って腰を抱くマモルに対し、眉根をハの字に歪め何度訴えかけても、彼は口元をニヤつかせるばかり。

「濡れた水着の感触。ママのケツの肉付き、どっちも最高だよ」

「ひっ、やあ、擦りつけないでっ」

きつめの水着に引き絞られた尻肉が温水の中でくねり、真後ろのマモルの股間を意図せず擦り立てていた。双臀の谷間に押し当たるマモルの、海パン前面のふくらみ硬くて熱っぽいその感触に慄き腰を引こうとすると、卵ローターの振動が強まって、たたらを踏まされる。マモルの手に抱き寄せられて密着度を強めさせられ、尻への摩擦と、尻穴の内の振動、二つの肉衝動に犯され続ける事態から抜け出せない。

「あんまり変な顔していると周りに気づかれちゃうかもしれないよ」

「……っ！」

耳打ちされてうつむきかけていた顔を上げれば、温水プールを楽しむ客の顔が次々視界に映り込んできた。時期が時期だけにひしめき合うほどではないが、それでも気

を付けていなければ肩をぶつける可能性がある程度には盛況の、室内温水プール場。冬休み中という事もあり、客の大半は若年層。家族連れもちらほらいるが、優弥やマモルと同年代に見受けられる子供の数がずつと多い。

「やつ、あああ……ひっ!!」

息子たちと同じ年頃の子に、はしたない様を見られてしまう——。周辺の、特に若い牡の視線を意識した途端、肛門内の振動が強まる。

「ふふ、ママのお尻。きゅっ……て、引き締まっちゃってるね」

「そ、んな……あああ……」

ローターの振動が強まったのではなく、緊張で引き締まった肛門がローターにしがみついたのだ。マモルの囁きでその事を気付かされ、羞恥にまみれた艶尻が、ぶるり切なさに打ち震えてまた、少年の海パン越しの肉勃起を撫で扱いてしまう。

「競泳水着っていいよね。身体のラインがよく出るし。特にママみたいな、スケベな身体した女の人だと……ひひっ。乳首、浮き上がっちゃって位置丸わかり♪」

「んはああうっ!」

不意に両胸を強く鷲掴まれ、堪えきれなかった艶声が頼子の口から飛び出した。少年の指は一発で的確に左右の勃起乳首を探り当て、つまんで捏ねくり出している。視

線を落とせば確かに彼の言う通り。ツンと突き立ち薄手の水着生地に浮き上がった勃起乳首が映り込む。濡れて吸着度の増した水着の締め付けに加え、マモルの指による摩擦愛撫に晒された両乳首は、傍目にも丸分かなりなほど隆起してしまっていた。

「ふっ、んっ、んうんはっ……ああ……。おっ、お願いよ、マモルちゃんっ。もう……っ、もお許してえ」

胸先からジンジン響く快樂の痺れが、背を伝いへその裏側にまで到達、染み入ってくる。直腸を震わせる卵ローターの振動が、排泄用であるはずの穴の内をほぐし蕩かしてゆき。ジュツと温かな腸液が染み出して、ローターの滑りをよくしてしまった。

「お、落ちちやううう。お尻の中のっ、こ、こんな所でええっ」

「落としたらばれちやうかもね。そしたらママとボクは変態認定されるね。ゆくゆくは町中の噂的になって、一生後ろ指さされ続ける羽目になるかも」

そうなったら、優弥の未来に傷が付く。優しい息子は心にも傷を負い、打ちひしがれるだろう。ふしだらな真似をして、と軽蔑されるかもしれない。

(嫌。優弥にそんな目で見られるのは絶対にイヤよ……!)

慌てて尻の穴を、腸内で滑る異物が落ち出ぬよう、力の限りに食い締めた。

「っふうう。んっ、ぐ、んぐうううっ……っ」

一足飛びに強まった振動に揺さぶられて、腸内に喜悅の痺れが奔りめぐる。染み出る分泌液でますますぬかるむ腸内状況に感化されてか、触れられてもない膣内でも蜜が湧き出してきた。

「人前で乳首勃たせてお尻振って……感じて、濡らしてるんだね。恥ずかしがりで淫乱な変態ママ。ボクの理想の、ママ。好き、大好きだよママああ」

二人の間でしか通らぬ小声で饒舌に、マモルが淫らな発言を繰り返す。二人の時間に没頭するあまり、周囲の目を忘れていたのではないか——。衆人環視の状況に恐れを抱く頼子の目には、少年がいつも以上に暴走しているように思えてならなかった。

「つあ、ひいんんつ。うう、マモルちゃん、駄目。エッチな言葉使っちゃ駄目なの、うううう」

こんなところで破滅は御免だ。優弥を守るためにもマモルの暴走を食い止めなければならぬ。さらに、マモル自身の将来にも心配は及ぶ。恥辱のさなかにあつてもまだ、頼子の胸には教育者としての意識が残されていた。

「アイツのことを心配してるの？　ここでばれたらアイツの未来に傷がつくからって、思ってるんだ。それで声を我慢しようとしているのママ」

「そ、そうじゃないわ。私はマモルちゃんの事を心配しつ、ふあうつ」

嫉妬に駆られた子供の手が、機嫌を取ろうと媚びた艶母の肌の上を這い回る。ローターのスイッチを持った側の手で乳房全体を揉み捏ねる一方。乳の谷から腹部、へそ周りと滑り落ちたもう一方の手が、股布食い入る恥丘へとたどり着き、こちよこちよと柔肉をくすぐった。

「ふぁあ！ やつ。そ、そこは駄目よ。お母さん謝るから、許して……」

「休みになってから中イキできてないから、全身敏感になつてるでしょ？ この身体の事は、癖付けたボクが一番、ママ自身よりも知り尽くしてるんだよ」

「そつ、んな事……」

事実だった。マモルと会えない間何度も自慰に耽つたが、覚えてたで、しかもネットでかじつた程度の知識しかない自分の拙い指裁きでは、一度も絶頂まで至れなかつた。ギリギリまで昂れても。最後の一押しが成らない。そんな菌痒い思いを繰り返すたびに脳裏に蘇る、マモルの激しくも丁寧な口唇と指による愛撫の味。嫌悪しつつも忘れ得ぬ、麻薬のような甘露な痺れ。

（私の身体、飼ひ慣らされてる。こんな小さな子に。息子と同年の子供に）  
認めたくなかつた現実が、捏ねくらられる胸に愛撫の恍惚と共に染み渡る。

「ふぁあ……つ、あぁつ」

これから忘れじの甘露を味わえるかもしれない。そう考えただけで胸と腰の芯が火照り疼く。引き攀れた肛門がぎゅつとローターを抱き締めて、振動刺激の快感に酔いくねった。牝尻がマモルの股間のふくらみを愛で擦り、応じた少年の手がまた、さわさわと恥丘を撫で回す。

「ほら、もう一度よく周りを見渡してみて、ママ。特にプールの中央辺りをね」

「うう……んう……?」

ゾクゾクと背に巡る予兆。絶頂へのカウントダウンを刻む痺れの強まりに浸りかけていた頼子の視線が、マモルに促され再度プール内を見渡した。

そして、見つけてしまう。

「ゆ、う……っ」

「今日は友達とプールに来てるんだよ。へへ、アイツつてばママを驚かそうと思って内緒にしてみたんだね」

マモルの言葉を、我が目が映し出す光景を信じたくなくて、うつむき喘ぎ、濡れた黒髪ごと首を振る。それでも視界に捉えた——プールの中ほどに立つ若者は、違えようもない我が子。連れ立った同年代の男女と楽しげに談笑する優弥が、そこにいた。

「あ……っ!!」

距離の離れた場所にいる優弥を恐る恐る見つめていると、不意に目線が重なる。

「あゝあ、じつと見るから向こうも気づいちゃった。こっちに来ちゃうね」

「マモツ、マモルちゃん早くこれ、取って！ 早く」

肉の恍惚に溺れるゆとりなど、瞬時に吹き飛んでしまった。

「これ、じゃどれの事だか。わからないよママ」

放した手をぶらつかせて屁理屈を捏ねる少年を、説き伏せる間もなく。

「母さん、ここに居たんだ。もうスクールの方は終わってたんだね」

日常の、屈託のない笑顔を浮かべた優弥が到来する。

「同じプールだって事、昨日言われた時に気づいたんだけどさ。驚かそうと思って、黙ってたんだ」

驚愕する母の顔を見て満足げに笑んだ息子の目が、その母の真後ろに張り付くクラスメイトにも向いた。

「あ、マモル君も来てたんだ」

「ぐぐ、偶然……だね。ボクも今さつき、たた、高瀬先生と会ったところ」

絶対に偶然なんかじゃない。水の中の腰を摺り付けてニヤつく彼の思惑は瞭然だ。焦りに焦がれる頼子の心拍が瞬く間に跳ね上がる。マモルは前もって優弥がプールに

来る事を知っていた。その上でわざわざ同じ時間帯、場所での逢瀬を指定してきたのだ。

「そうなんだ。ね、マモル君も一緒に来ない。他にもクラスの連中がたくさん来てるから、一緒に遊ぼうよ」

「い、いいよ。ボクは。もう少ししたら帰る……から」

表面上は普通を取り繕いつつも、拒絶の意思を露わとするマモル。友人と称する優弥以上にマモルの性根を深く知る頼子には、その瞬間の彼の心情が手に取るようになってわかってしまう。そんな頼子にしても、マモルが次に取った行動は予想だにしない異常なものだった。

「んひっ!!」

ぴったり吸着する競泳水着の裾をめくって、マモルの指が一本、肛門へと突き入ってくる。ローターを落とさぬよう引き締まる腸壁をめくり上げるように抜く指の動きに、喜悅の痺れが奔り抜け。その衝動に押し出され吐きこぼれた短い嬌声が、優弥の気を惹きつけた。

「ど、どうしたの母さん。急に変な声出したりして」

「……っ、何でも、ないのよ。ちよつと、しゃつ……くりが、出ちゃって」

母子の対話中にもグリグリと尻穴をほじるマモル。ちらと横目で覗き見たその表情は優越と恍惚に彩られて上気し、いつも以上に醜く歪んでいる。

(優弥の前ではやめて!)

目で送った合図は、フルフルと小さな首振り拒絶された。

「母さん?」

「っ、う……ご、ごめんなさい、聞いてなかったわ。何……?」

息子との会話に集中できようはずもない。ほじられる事で生じた腸内の隙間に滴る腸液に乗って、震えるローターが転げ落ちそうになっていた。慌てて肛門を引き締めれば今度は、ローターに加えてマモルの指の蠢きまでも堪能し尽くす羽目となる。

「最近ぼうつとしてる事多くない?」

(ああ……お尻の中でグネグネ動き回ってる。くすぐったり、引っ掻いたり、優弥の前なのに好き放題して……。なのに、うう。どう、して……こんなに疼くのよお)

優弥がいる手前触れられなくなってしまう両胸に、耐え難い飢餓感が充満している。水面にさざ波を立ててうねる腰で、無自覚の内に背後の少年の勃起を愛でてしまふ。優弥との対話よりも、肉の痺れを伴う摩擦行為へと、意識の比重が傾いてゆく。

「ゆ、優弥っ」

「ん、何。母さん」

「お友達を待たせるのは良くないわ。早く、行ってあげなきゃ」

——今の自分は、きちんと母親らしい笑みを湛えられているだろうか。自信のないまま笑みを張り付けて、声の震えを極力抑え、息子に戻るよう促す。優弥はすぐに素直に応じてくれた。

「うん。わかった。それじゃ、後でまたね母さん。マモル君も、時間が合ったら一緒に帰ろうよ」

手を振って、何も知らない優弥が遠ざかっていく。息子が背を向けた瞬間、ほっと胸を撫でおろしてしまった。痴態が露見せずに済んだ安堵感。そして、マモルの手による愛撫が再開される期待感に押し流され、自ずから救いの手を遠ざけてしまった。

「アイツがいる間中、痛いくらいボクの指に食いついてたよ、ママのお尻の穴」

「それはっ、急に指なんて入れてくるから。それで驚いただけ……そんな所で感じるわけがないわ。ない……わよ」

胸の内に揺らめく期待感ごと否定しようと、躍起になって頼子は首を横に振る。その様子に思うところがあつたのか。

「んひいっいっいっ」

「へへ。ママはボクの方を選んだってわけだ」

喜色満面となったマモルの指先が、またも滑り落ちかけていたローターをつつき押し上げた。肛門の肉壁を、これまで以上に深い位置まで捏ねくられ、とどめ様もなく引き攣った艶声が迸る。

「ほら、まだあそこでこっちを見てるよ、アイツ。見せつけてやろうよ。本当のママは、こんなにも変態ではしたないのよ、つてね」

「ふあうっ！ い、言わないで。優弥の事、意識させないでええ」

涙声になって懇願した頼子の水着の股布を、マモルのもう一方の手が尻側から勢いよく引つ張った。

「んくうううっ、ふあ、っ、やつ、あああはああ……ひっ、つばらないでえっ」

「こうするとクリ擦れて、痺れるでしょ。立つてられなくなったら、ボクにもたれかかっていいからね」

「ク……り……？ んひやつ！ ああうう」

それがクリトリスの略称である事に気づいたのは、当該の部位に食い入った股布との摩擦で電撃めいた痺れが下肢に響いた瞬間。頭よりも先に、肉体が理解した。

「中イキの次はクリイキも……ね。全部教えてあげる。全身どこでもイケるスケベマ

マに、なって欲しいな」

「そんつ、なのつ……んくう、やつ、ああ、つひ、んひいい」

嫌だ、怖い。そんな負の感情が喉元まで出かかっているのに——。意に反した尻が揺れ、肛門がまるで指とローターをさらに奥へいざなうように蠢いた。

「アイツが手振ってるよ。振り返してあげなきゃ、変に思われるんじゃない？」

「ふ……つ、う、んぐつ、うう……っつ」

嬌声を堪えようと口元に添えていた二つの内の片手を持ち上げ、遠くの優弥に向け振り返す。そのさなかにも、陶然とした意識下では、身に蔓延する肉衝動との争いが継続していた。

「塾のトイレでした時に確信したんだ。ママにはこっちの才能もあるって」

こっち、という言葉に続いて肛門をほじり回すマモルの息遣いが荒ぶってゆく。振り向けば、興奮のるつぽへと浸かった少年の、熱に浮かされたぎよる目に直視された。

ローターの振動と指の回転、抽挿運動、異なる愛撫に弄ばれる頼子の息遣いも、負けじと乱れ、食い縛った口の端から漏れこぼれる。抑えきれぬ渴望が、息子も含めた衆人環視の場という危機感をも呑み込んで、押しきろうとしている——。

「お尻でよがるスケベママ。おかげで、ほら……もう、こんなにピンピンだよ？」

「ひうう!!」

頼子の抵抗を完膚なきまでに押し潰さんがため。最悪かつ絶妙のタイミングで、牝尻に熱々の肉感が押し当たたる。エラの張った突端と、反り返った幹。小刻みに脈打つ、長大な肉の砲身。振り向かずともソレが何なのか、わからされてしまった。

「ひ……っ、や、めっ……んひやあぁう！」

モジつく腿と腿の合間に、温水の中でも抜群の熱気と存在感を發揮する肉の棒が割り入ってくる。突き抜ける際に強烈に擦り上げられた頼子の股根の奥底で、胎動していた肉の疼きが決壊した。

「ほら、また声。我慢しなきゃ、ばれちゃうんだからね」

「そっ、んなの、無理い……無理よお……んむうっ、ふくっ、ううう……」

ゴシゴシと女陰を擦り立てながら行き来する肉棒の、圧倒的な存在感に慄きつつも意識が傾く。水着越しでもはつきりとわかるごつごつとしたフォルムが、雄々しく脈打っている。肉厚の幹から放たれる熱量は摩擦によっていっそう増し、水中の他の部位が冷やされている事も相まって、沸騰しているようにすら感じられた。

水中の浮揚感も相まって前に押し出されそうになるのを踏ん張り耐えると、余計に牡肉の存在を意識させられる。

肛内のローターとは違うリズムで、食い入る競泳水着越しに女陰を揺さぶる、ペニスの鼓動。内腿を擦る亀頭の、傘のように張ったエラの感觸。

「んうあつ、あああ……ひいんつ、んんうう」

マモルの発言により再意識させられた周囲の目に怯えつつも、感じずにはいられない。響く牡肉の鼓動と同調して、扱かれる恥部に広がる疼き。呻くように震えた膣の奥から蜜が染み出ているのを、密着したマモルは気づいているはずだ。

頼子の夢想を肯定するかのようになり、グツと肉砲を押し込んできた彼の腹に潰された尻が、ウズウズと身悶えた。

「ひ……やつ、あ！」

長大ペニスの亀頭が再度頼子の内腿を擦り、ひよっこり股の間から顔を覗かせる。折悪く視線を落とした頼子の目に飛び込んできたその光景が、また新たな羞恥と被虐的恍惚を呼び込んだ。

「まるでママから生えているみたいだね」

「ばっ……馬鹿な事言わないでちょうだい……うう」

——変態性欲の権化の如き子と、同じ発想に囚われてしまうなんて。恥じ入りながら視線を上げると、不意に前を行き過ぎる男性客と目が合った。

(ひっ！ 今のっ、み、見られて……!?)

視線の交錯はほんの一瞬だったし、気のせい、錯覚だ。そう思い込む事で己を納得させようとしても一向に、胸の鼓動が鎮まる気配はない。焦り狼狽えた末に、伸ばした手のひらで、またちようど飛び出て来た亀頭を覆い、包み隠してしまった。

「うはっ！ いいよ、それ。ママの手のひらとボクのちんこでチュツチュ、キスするみたいにするの、いいっ、ゾクゾク来ちゃうう」

「ひゃあうっ。うう……あ、あんまり激しくしないでっ。前に倒れてしまおうわ……ひんっ、んっ、んう、んんうああ……！」

前のめりになり、揺さぶりをかけられながらも視線だけ持ち上げ、プールの中央付近を見つめる。いつの間にか、優弥の姿が見当たらない。友人たちと別の場所へと移動したのか。

(お願いだから、こつちには来ないで！ はしたない私を、見ないでえ！)

手のひらに繰り返し押し押し当たる亀頭が、ヌルリとした湿り気を擦りつけてくる。指間にも垂れて染み入るその粘り気と温みに惹かれ、自然と牝尻がくねり舞う。合わせ、暴れるローターにほぐされた腸内でも歓喜の汁が波打った。

(人が見てる、のに……駄目、だってわかってるのに。腰が、勝手に動つ、くうう)

きつく食い入った競泳水着の締め付けに悶えながら、さらに摩擦熱と脈動の揺さぶりに哭かされた陰唇が、クパクパ。物欲しげに蠢いて蜜を漏らす。刺激を待ちわびる子宮が胎動し、モジモジと頼子の内腿が身悶える。その摩擦が凶らずも牡勃起を擦り立て、悦び勇んだマモルの激しい律動を誘った。

同時に伸びてきたマモルの片手に胸を押し掴まれ、浮き立った乳首をつままれる。少年の小さな手指の隙間からむにゅりと押し出た乳肉。その卑猥な有様に耽溺しかけた意識下に、つねられた乳首よりの痛痒い痺れが轟く。

「あう！ うう、ン！ やつ、あは、ああつ、む、胸とおちんつ……ちん、一緒に許して……ひつ、うあんン……！」

おチンチン。マモルにだけ伝わる小声でとはいえ呼称を口にしてしまった事で、なおの事意識する。彼の手のひらに包まれた胸の内側では引つきりなしに心臓が高鳴りよじれ食い込む薄布では隔てきれず触れ合う互いの性器が、鼓動と熱とを伝え合う。

（ふぐ、うううつ……おチンチンの熱さ、硬さ、太さ……堪ら、ないいいつ……。人前なのに。優弥だつてどこかで見てるかもしれないの……にいいつ！）

股の前に構えた頼子の手のひらにぶつかる亀頭の中央で、尿道口がパクついている。太腿に擦れる肉の幹が脈打つ間隔を狭め、いつそう硬く、太く張り詰めていく。



「……っ、もう……出すよ。ママのお手てに亀頭キスしながらっ、このまま出すっ」  
持ち主の宣言よりも一足先に、腿と手のひらとで予兆を感じ取り、反射的に内腿を  
引き締める。

「うう！」

通り道を狭められた肉棒が、増した摩擦に喜びの脈を轟かせたのと、ほぼ同時。

「はっ、ああは……っ、ひやあああっ」

眉根を悩ましく歪め、身の内に奔る愉悦をか細くも甲高い嬌声に変えて吐き出した。  
その汁濡れた股間に、また、あの忌まわしき感覚。尿意が迫り来る。

「やあひっ、漏れっ、ちやうう……マモルちゃんっ、わたっしいっ……」

「いいよ、このまま……アイツが見てる前で、プールにお漏らししちゃいなよっ」

——ドクン。アイツ、と告げられて反射的に凝らし見た視界の只中。遠く離れた真  
正面に、友人を連れ立ってこちらへと向かってくる、息子の顔があった。

（嫌ああああ！ 優弥の前でっ、お漏らしするなんて……嫌、嫌よっ、絶対っ！  
止まって、お願いっ、堪えてえええええっ！）

限界まで見開いた瞳に、恐怖の色が染み渡る。なのに身体は、肉欲と、失禁の開放  
感を欲し、ますます内腿を引き締め、ローターの振動に合わせて尻を揺すった。

「一緒にイクよつ、ママ。ほらつ……ほらいケつ！」

肉棒の前進と同時に、競泳水着の股布が後ろへ引き絞られる。

「ふぐつ、んむうううう……くくくッッ！」

強かに扱かれた陰核が、疼き悶えながらひと際隆起して、白く孕んだ恍惚を噴き上げた。ズパンッとひと際波音を立ててぶつかってきたマモルの腰が、身震いと共に白濁色の熱汁を噴き上げる。手のひらにすり込まれる種汁の粘着力と勢いの強さに押しされて噴き出そうになるはしたない喘ぎを、どうにか無理矢理口内に閉じ込めた。

牡の絶頂を知らせる脈動をじかに浴びた女陰が、切なさにもみれながら蜜を滴り落とし、真下の肉棒をなお愛でる。牡肉と卵ローター。異なる二つの振動に煽られて、頼子の尻が二度三度縦に弾んだ。そして――。

「ふううあつ……はひ、いいい……やああ。うう……んうう！」

黄ばんだ尿液が迸り、温水に混ざりゆく。煽るようにマモルが腰振りと乳首弄りをやめないせいで、唇を食い締め嬌声をくぐもらせるのがやつとだった。決壊した膀胱が軽くなるにつれ、解放感と被虐悦楽が隙間に擦り寄り、沈殿する。

絶望に喘ぎかけた矢先に、視線の先の優弥が無邪気に手を振った。

「ふうあああ……つ、んひつ、ひい、いいん……！」

ろくに思考が働かぬまま、温水で幾分薄まったマモルの白濁汁にまみれる手を振り応じる。ただそれだけの振動でまた、ぶり返してきた歓喜の痺れに撃ち抜かれ、腰から下が笑い出す。淫らに蕩けた表情を見られたくなくて、水面に沈む寸前まで顔をうつむかせ、目を瞑った。

「あは……ははっ。乱暴だったけど、クリイキもクリアだね。嬉ションするママの表情、最高だったよ……っ、竿に残ってる分も、出すからねっ……」

なお引き締めた状態の内腿にすりすり、射精直後の過敏な肉幹が擦り寄った。擦りつけられる精液の粘りと熱量。濃厚さを猛烈アピールする諸々が、蔓延する気だるさと相まって疎ましい。

その一方で、真逆の感情が、憂える女講師の心根を揺さぶり続けていた。  
(こんな、のっ……おかしい、わたし……)

股肉で、腿で、手のひらで感じ取った、牝の情欲。一週間ぶりに浴びせられた種汁の感触が温水に溶けて薄れゆく。その事が悩ましい。名残惜しいと思ってしまう。

「……つはああ。ほらっママ。アイツがもうすぐそこまで来てる」

必死に食い締めていた牝尻から、マモルの指が引き抜ける。その際すがるように指に吸いついた肛穴が、なお肉の愉悅を欲して蠢く。

「……っ！ やあっ……」

何も知らぬ息子に痴態を晒す恐怖に駆られ、弾かれたように水中で身を翻し、気づけばプールサイドへと飛び出していった。間近で見れば、いくら無垢な優弥であっても異変に気づくに違いない。それだけ卑しくふやけた、母親がしてはいけない表情を浮かべてしまっているとは自覚できていたから。

「あれ？ ねえ、マモル君。ウチの母さん、どうしたの？」

「あ、ああ。トト、トイレに行くつて。それと、用があつて帰りは遅くなるから、先に帰っていいつて、い、言つてたよ」

背に感じる息子達の視線。腹立たしくも白々しいマモルの嘘八百にも、振り向き応ずる事ができない。いつの間にかローターの振動が止まっている、スイッチを切られている事に気づいて、安堵よりも飢餓感の方が募りゆく。

（早く……これ、取らないと。私の心と身体、元に戻れなくなる……）

「用事つて……スイミングスクールのお母さん連中と約束でもしたのかな」

「ささ、さあ。ね……」

「……しようがないなあ。ちゃんと出がけに約束したのに」

声だけでも落胆の様子が窺える息子の溜息が温水プールの水面を揺らした時には、

もう。卵ローターを孕んだままの艶尻は目の届かぬ彼方に遠ざかっていた。

4

室内プールから逃げ出した頼子と、その後を追ったマモル。二人はあらかじめ決めておいた合流場所で落ち合うなり、どちらからともなく荒い息を吐きこぼす。

「うう……はあつ、あああ……」

更衣室にほど近い位置にある女子トイレの、最奥の個室。いつ人が訪れるともしれぬ危うい密室で、頼子は便器側の壁に手を着いて、背後のマモルに向け尻を突き出す。競泳水着の股布はよじつて脇に寄せられ、剥き出された割れ目からは温水とは違う甘酸っぱい蜜が垂れこぼれている。

「いいよ、ママ。このまま、いきんで。ボクが手で受け止めるから、ひり出して」

「ふうっ！ んっ、んんっ、んぐっ、ううう……！」

もう、限界だ。一時の猶予もない。言われるがまま下腹部に力を込め、恥も外聞もかなぐり捨てていきんでみせる。眉根がたわみ、羞恥に赤らむ頬が震えた。食い縛った口元からは、くぐもつたいいきみ声と唾液がこぼれる。



色の卵ローターがひり出され、真下で待つマモルの手のひらに転がった。

「ああ、これがママのお尻の臭いなんだね……」

手にするなりローターを咥えたマモルが、味わうようにクチュクチュ。卑しい音を立ててピンクの卵状物体をしゃぶり出す。

「や、やめなさい……お腹壊したら、どうするの……」

羞恥にまみれる姿を誤魔化すように、あえて常識的な苦言を呈したものの。まだ、彼の眼前で揺らぐ尻の谷間で息づく肛穴が、ぼっかりと開いたまま。内の薄桃粘膜を覗かせて、物欲しげに伸縮を重ねている。

（ああ……やつと終わった、のね……）

尻の奥にくすぶる渴望を噛み殺してしまおうと、歯を食い縛り、肛穴を引き締める。寂寥と疼きを秘かに呑み込んだ頼子が身じろぎするのを、見届けたかのように。

「ボク、アイツに対して嘘はつかなかったよ。ママはこの通り。トイレに来てるし、遅くもなるもんね」

しゃぶったローターを便器の蓋の上に置くなり、マモルがそんな話を持ち出した。

「そ、そう……ね。ありがとう。……偉かったわよ、マモルちゃん」

褒めて欲しいのだろうと察して媚を売る。なおも何かを欲する目で見つめてくる少

年に対し、頭でも撫でてやればいいのだろうか、と考えだした矢先。

「ご褒美に、ママの処女をちょうだい」

「……どういう、意味？ ……っ!!」

意味不明瞭な言葉の意味を問い返す頼子の声音と、尻向こうで少年が海パンを引き下げる音。二つの異なる響きが、見事に被さった。

「ひぐっ!! やっ、な、何してるの！ そっちは違っ……んひいい、待ってえ！」

引き留める間もなく肉勃起が、ぼっかり開いた肛門へと突き当たる。染み出た腸汁とローター振動でほぐされた肉穴が、待ちかねていたというように蠢きうねって、牡の亀頭を舐め上げた。

「ひう！ や、やめなさいっ。そこは……おチンチンを入れる場所じゃないのよ!」

「だったらどうして物欲しそうにお尻くねらせてるのさ。ねえっ」

「ふう、ううん……っ、やめて、やめええ……っ」

逃れるためか、摩擦を味わうためか。しきりに揺らぐ熟れ尻を両手でがっちり押さえつけ、引き寄せたマメルが悪辣な笑みを浮かべる。凶悪な反りと太さを誇る肉槍の切っ先が、ローター愛撫で弛緩しきった肉穴へと、浅くめり込んだ。

「んぐううう！ は、ひい、む、無理いつ、裂けちゃうからあぁっ」

「前の穴はママがおねだりするまでしない。約束したもんね。だから……っ！」

驚愕し引き摺られる穴の入口をこじ開けて、じわじわと巨根が突き刺さる。カリの一番太い部分がねじ込まれてしまえば後はもう、腸液のぬめりも手伝って易々。ぬかるみほぐれた腸粘膜を擦り立てながら、熱々の肉棒が収まった。

「んぐっ、うう、く、苦しいっ。抜いっ、てえええ……っ」

「うはっ、ギッチギチだああ……安心してママ。今回は慣らすだけ。ほとんど動かさなくてもこのきつさならすぐにつ、出せるからさっ」

宣言通りゆるゆると、突き入ったばかりの肉棒が引き抜かれてゆく。

「んふうああああ……！」

「ケツ穴の壁擦られるのは気持ちいいでしょ？ その感じ、よおく覚えといて」

腹を内側から押し上げる、苛烈な圧迫感に苛まれる一方。腸壁を削られる感覚には脊髄に響くほどの愉悦がたっぷりと含有されていて、それが圧迫感を徐々に打ち消してしまう。

「はあっ、ああ……こんなのっ、間違ってるっ……」

濡れ髪を振り乱しイヤイヤと首を振る。己の身に起きている事態が信じられない。尻穴に男性器を挿入されている事もそうだし、それを快感と受け止め始めている事が

何より、頼子の心根に驚愕を植え付けていた。

「声出し過ぎると、外に誰か来た時に気づかれるよ。ここ、どこだか忘れてないよね」  
「ふぐうっ！」

いつ誰が来るともしれぬ公共の女子トイレ。改めて強く意識させられると共に、逃走という選択肢が消失する。事が露見すれば、これまでの忍耐が水泡に帰す。諦観した頼子の様子を見て取って、再度肉棒が緩やかなスピードで腸内に突き戻ってきた。

「んっ、ひい、んぐうう……うううっ」

肉棒の脈動一つ一つが鮮烈に腸壁に伝わり、一步一步が金槌で打たれたが如き衝撃となつて腸の奥底にまで響き渡る。少年の手に掴まれた尻肉に汗が浮き、押し出された喘ぎに酸素不足からくる掠れが混じった。

（やはあっ、ああう……お尻でっ、なんて……あり得ない、おかしいわよっ！ うう……それなのに）

腸壁に滲む液が垂れ滴ると同程度の緩慢なスピードで、着実に肛悦が染み入ってくる。緩やかなストロークで抜き差しされる牡肉にしがみつき、掘り起こされたように盛り上がる肛門と。摩擦に痺れ、熱を孕まされた腸壁が、肛門悦楽を貪ってなお物欲しげにうねる。

「んはっ、あひい……おっ、願いよおお……」

お願いだから抜いて。お願いだから、もつと——対極の言葉が胸中でぶつかり、潰し合う。背後からのしかかったマモルの手が尻から胸へと伸びてきて、競泳水着の脇から忍び込み。じかに乳肉へと張り付き、揉み潰す。

「んひやあううっ、う、うう……ごめ……なさい、優弥ああ」

混乱する胸をきつく握り締められた途端。なぜだか息子の無垢な顔が思い浮かび、反射的に謝罪の言葉を吐かされる。

「こんな時にもアイツの名前出すなんて、近親相姦願望あるんじゃないのママ」  
(……っ!!)

そんなわけない。喉元まで出かかりながらそう言い返せなかったのは、初自慰の発端になった内の一つに、優弥の衣服の臭いがあつたのを思い出したからだ。

(あれは、あの時は何度も何度もイカされた後だったから……優弥の臭いだから興奮したわけじゃ……)

言い訳が募るほどに、脳裏に浮かぶ息子の笑顔が罪悪感を呼び入れる。

「ふう、ううっ、んんう！ ごめっ、なさい……ふぐうっ！ うう！」

嫉妬に駆られたマモルの肉棒がなおいっそう太く、硬く反り返って腸壁を抉った。

暴虐の限りを尽くす子供に許しを乞う惨めさが、被虐の愉悅を呼び込んで。

「うくっ、出るよ！ ヴァージンアナルに注いでやるっ」

吠えたマモルの肉棒が猛々しく鼓動する。とどめとばかり目一杯突き入ってくる侵略者を受け容れ、ぎゅつと抱き締めた腸壁が禁忌の悦びに開花する。

「ふぐっ！ うう！ んうあああああ……っ！」

喉も裂けよとばかりに、蕩ける想いを舌に乗せた直後。茹だつた白濁汁が怒濤の勢いで腸内に雪崩れ込んでくる。

「はあっ、はっ……ああ、全部飲んでママ……！ チュッチュしてええ」

気味の悪い子供の言い様が、肉の恍惚に融解する頼子の胸には心地よく染みた。

「全部出し終わったなら、上の口でもキスしよ……ね、ママああ」

慕情たっぷりの甘えた声音に対し、抗うだけの心根は、もう――。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**